

令和 2 年 9 月 9 日現在

機関番号：35304

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K17307

研究課題名（和文）読書量が多いのに言語力が伸びないのはなぜか：縦断調査・介入実験による検討

研究課題名（英文）Why do not some peoples who read a lot grow in language skills: a longitudinal study and intervention experiment

研究代表者

猪原 敬介 (Inohara, Keisuke)

くらしき作陽大学・子ども教育学部・講師

研究者番号：10733967

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：小学校および小中学校による縦断調査を3年間実施し、完了した。その結果、データ全体としては確かに読書量の多い児童ほど言語スキル（語彙や文章理解力）が伸びることが確認できた（上田・猪原・塩谷・小山内，2017；Inohara et al., 2018）。そのコストの高さから、読書と言語の関係についての縦断調査は我が国ではこれまで行われていなかったため、重要な知見である。一方、個人差の解明につながる有力な要因については特定することができず、介入計画についての新規計画の申請が必要であると判断した。そのため、本研究プロジェクトは4年間の計画で採択されたが、3年目で早期完了としている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1回限りの調査を「横断研究」、追跡調査を「縦断研究」と呼ぶが、要因間の因果関係に言及するためには後者の縦断研究が必要である。しかし、そのコストの高さから、読書と言語の関係についての縦断調査は我が国ではこれまで行われていなかった。そこで本研究はその縦断研究を小学校および小中一貫学校にて実施し、読書が言語力を伸ばす効果について実証した。今後、多くの機関でより大規模な縦断調査が実施されることが予想されるが、本研究成果はそのための下地となっている。

研究成果の概要（英文）：A three-year longitudinal survey of elementary and junior high schools was completed. The results show that overall, the more children read, the better their language skills (vocabulary and text comprehension) were (Ueda, Inohara, Shiotani, and Osanai, 2017; Inohara et al., 2018). Due to its high cost, a longitudinal study on the relationship between reading and language has not been conducted so far in Japan. So this is an important finding. On the other hand, we were not able to identify the factors that could lead to the clarification of individual differences. It was necessary to apply for a new plan for the intervention.

研究分野：教育心理学

キーワード：読書 語彙 文章理解 読解 小学校 小中一貫学校 縦断調査 追跡調査

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 1. 研究開始当初の背景

### 早期の言語力の重要性

言語力(言葉によって理解・表現をする力)は他者との交流・学業達成・幅広い職業選択を支える重要な能力であるが、「現在、言語力が高い者は将来もっと言語力が高くなり、低い者はそのままの水準に留まりやすい」という言語力のスパイラル効果が知られており(Stanovich, 1986) 近年の大規模調査でもその存在が確認されている(e.g., Verhoeven et al., 2011)。したがって、早期に一定水準以上の言語力を身につけることが、将来の言語力および他領域の能力を支える基盤の形成につながる(図1)。



### 読書による言語力向上

読書量が言語力と関連することは繰り返し確かめられてきたが(メタ分析: Mol & Bus, 2011), 読書による言語力向上効果を上下させる要因については未だはっきりしたことは分かっていない。また、先行研究のほとんどは海外(英語圏)の知見であり、日本児童を対象とした研究は寡少であった。そこで代表者らの研究グループでは、以下に示すような研究を通して、その状況の改善に努めてきた。

図1 本研究の背景

## 2. 研究の目的

### 公立の小中一貫学校での縦断調査

本研究では、東京都の小学校および沼津市の小中一貫学校で4年間の長期縦断調査を行うことで、「読書は言語力を伸ばす」という知見について検討する。小学校高学年(11~12歳)から中学校(13~15歳)にまたがる縦断データは通常得にくいいため、児童期から思春期にかけると重要なデータともなる。

### 言語力向上の抑制要因

また、「言語力の低い児童への支援」という観点を重視し、本縦断調査において「何が読書による言語力向上を妨げるか」という抑制要因の特定に取り組む。

## 3. 研究の方法

上記の縦断調査を行うことで、児童の言語力と読書習慣について詳細なデータを分析することができる。さらにその中から、「読書量が多いにも関わらず、言語力の伸びが良くない児童」を選び、言語力向上の抑制要因を特定する。

## 4. 研究成果

結果として、3年間の縦断調査を完了することができた。縦断データの分析を行った結果、過去の研究を再現して、全体としては読書量は言語力を向上させる説明変数となっている。一方で、やはり読書量が多い児童の中にゲインの多い児童(言語力が大きく伸びる児童)とほぼゲインがない児童が存在する、というように大きな個人差が見られた。国内の縦断調査においてこの知見が再現されることが示されたことは意義深く、その成果は2件の査読付き論文に採択されている(上田ら, 2017; Inohara et al., 2018)。

しかしながら、この個人差をクリアに分ける要因の発見には至らなかった。元々の語彙力といった「能力」要因の違い、もしくは、読み手にとって「少しだけ難しい」レベルの本を選んでいるか、という「本選び」要因を候補としていたが、本研究で用いた指標の範囲では、これらの要因によってゲインに有意な違いはなかった。

海外の先行研究でも、本当に介入すべき言語力の低い児童には、現在提案されている介入方法(未知語に対して、文脈情報を用いて推定させることを促すこと)は効果が小さいことが報告されている(Elleman et al., 2017)。ゲインの多寡についての個人差には、当初研究計画で想定していたよりも、複雑なプロセスが関与していることが考えられる。十分な根拠を持たない状態で介入実験を行うことは研究者倫理にもとる。また、実験参加者および調査協力校との信頼関係を失うことになりかねないため、新しく研究計画を立案し、将来的な介入実験に向けた知見の蓄積に務めることとした。

以上のような経緯により、本研究計画は3年での早期完了とした。新たな研究計画において、

個人差を説明する要因を発見し、介入研究を行うことが必要である。

<引用文献>

- Elleman, A. M., Steacy, L. M., Olinghouse, N. G., & Compton, D. L. (2017). Examining Child and Word Characteristics in Vocabulary Learning of Struggling Readers. *Scientific Studies of Reading*, 21(2), 133-145.
- Inohara, K., Ueda, A., Shioya, K., & Osanai, H. (2018). The Effects of Reading Amount on Letter Reading Skill: A Longitudinal Survey of Japanese Elementary Schoolchildren. *Psychologia*, 60(2), 60-85.
- 上田紋佳・猪原敬介・塩谷京子・小山内秀和. (2017). 語彙力・文章理解力の発達に及ぼす読書のジャンルの影響 小学生3年生を対象とした縦断研究 , *読書科学*, 59, 121-133.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 INOHARA Keisuke, UEDA Ayaka, SHIOYA Kyoko, OSANAI Hidekazu	4. 巻 60
2. 論文標題 THE EFFECTS OF READING AMOUNT ON LETTER READING SKILL: A LONGITUDINAL SURVEY OF JAPANESE ELEMENTARY SCHOOLCHILDREN	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 PSYCHOLOGIA	6. 最初と最後の頁 85~96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.2117/psysoc.2017.85">https://doi.org/10.2117/psysoc.2017.85</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 猪原敬介・上田紋佳・塩谷京子	4. 巻 50
2. 論文標題 乳幼児期から児童期における読み聞かせ頻度の変化と保護者の持つ読み聞かせの効果への期待-小学校に児童を通わせる保護者を対象とした実態調査-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 くらしき作陽大学作陽音楽短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 上田紋佳・猪原敬介・塩谷京子・小山内秀和	4. 巻 59
2. 論文標題 語彙力・文章理解力の発達に及ぼす読書のジャンルの影響 小学生3年生を対象とした縦断研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 読書科学	6. 最初と最後の頁 121-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 猪原敬介・古屋美樹・松尾千佳・沓澤糸
2. 発表標題 日本語語彙についての多肢選択課題と既知判断課題の成績の関係 高校生から60歳代までを対象とした大規模調査
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 上田紋佳・猪原敬介・小谷田照代・塩谷京子
2. 発表標題 文章理解力の発達に及ぼす読書のジャンルの影響 図書貸出数を用いた縦断研究による検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 上田紋佳・猪原敬介・小谷田照代・塩谷京子
2. 発表標題 児童期における読書が語彙力・文章理解力に及ぼす影響 読書意欲の観点からの縦断研究
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 猪原敬介・松尾千佳・古屋美樹
2. 発表標題 語彙についての既知-未知判断課題および多肢選択課題と読書への親近性の関連 高校生から60歳代までを対象とした大規模調査による検討
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 猪原敬介
2. 発表標題 「読書からの語彙学習」効果シミュレーションのための予備的検討
3. 学会等名 日本認知科学会第36回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 猪原敬介・松尾千佳・古屋美樹・沓澤糸・上田紋佳
2. 発表標題 語彙についての既知-未知判断課題は多肢選択課題をどの程度予測するか 高校生から60歳代までを対象とした大規模調査による検討
3. 学会等名 日本認知心理学会第17回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 トレヴァー・ハーレイ、川崎 恵里子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 誠信書房	5. 総ページ数 426
3. 書名 心理言語学を語る	

1. 著者名 楠見 孝	4. 発行年 2019年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 208
3. 書名 学習・言語心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----